

ぴったり合う教科書はあるのか

前回、『日本語の基礎』という教科書について述べたが、優れた教科書であることは多くの教師が認めるところである。しかし語彙の面では日本語教育の現場から不満もあったようだ。具体的には技術研修生が実習に行く工場で使われる単語がけっこう出ていることや、会話文の内容も工場での会話が出て来ることだ。具体的に言えば「ボルトやナット」「ペンチやドライバー」など、一般的な初級の日本語で扱われないような単語が扱われていることだ。授業を担当する教師にとっては日常生活で使うような他の単語を扱えばいいのと思うのも無理のない話である。筆者もパリの天理日仏文化協会に勤務している時に、そのように感じてはいた。

しかし、『日本語の基礎』は海外技術者研修協会が技術研修生のために開発したものであり、技術研修生にとって使用頻度の高い日本語の文型や語彙や表現を厳選して編纂していることを考慮すれば、必然的にそのような単語が含まれていることも納得できることである。このような日本語教育のそれぞれの現場での意見も考慮して、『新日本語の基礎』や『みんなの日本語』という流れができたのかと思うと、そのベースとなる『日本語の基礎』が日本語教育の現場で先人の日本語教師が蓄積してきたノウハウの上に成り立っているものだとわかる。筆者の経験では、その教育機関で100パーセントぴったり合う市販の教科書はないように思っている。それぞれの教育機関の教師たちが現場から声を上げ、検討を重ねて自主開発しない限りできないものとも思う。しかし、現実には授業で使う教案、教材教具の準備や会議など雑多な校務もあり、教科書を開発するような時間も取れないところも多いように感じる。よく「教科書を教える」のではなく、「教科書で教える」とも言われるが、優れた料理人が作る料理のように素材を活かした授業を展開できるよう、日々研鑽するしかないのかとも思う。

天理独自の教科書

天理教の海外布教と日本語教育というものをリンクさせて考えていけば、教科書の内容も天理教の教義や信仰に関わる内容が盛り込まれていくことも自然な流れであると考えられる。学校設立の経緯や理念などを考慮して教科書で扱われる題材も天理教的なことが盛り込まれることは学校の特色にもなる。天理大学別科の時代に独自の教材が開発されたことはすでに述べたが、その教科書の中には天理教の話を題材にしたものも扱われていた。天理大学別科日本語課程編『日本語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』であるが、一冊目の『日本語Ⅰ』では天理教に関することは一切入っていない。これは海外の拠点にある天理教系の日本語学校でも使われることも考慮して、宗教色を取り払ったと筆者は聞いている。海外の拠点では主に初級レベルの日本語教育が中心となっている上に、日本語の基礎的な部分を扱うのであるから、内容も初級で扱われる語彙や文型が中心になっている。『日本語Ⅱ』でも信仰に関することは入っておらず、天理大学の紹介や学校生活の場面などが描かれた本文の中で、初級後半レベルで扱われる文型が各課に配分されて入っているという感じであ

る。『日本語Ⅲ』では、中上級で扱われるような語彙や文型が入り、本文のトピックも「多数決」「辞書の引き方」「故事から生まれた言葉」「日本人の食生活」「農業」「地震」「かぐや姫」「日本の雇用制度」など多岐にわたっている。

その中の11課で、唯一「けっこう源さん」という天理教の話が出てくる。これは京都にある天理教河原町大教会初代会長の深谷源次郎の物語で、その入信の経緯やその後の信仰生活について書かれた文であるが、留学生にも読みやすいように平易な文で書かれている。「源さん」という一個人の物語という形でまとめられて、宗教色が感じられないような形で書かれているようにも感じる。「けっこう源さん」に関しては、天理教道友社が「道の先人シリーズ」として劇映画として制作されたものがあり、教科書の勉強が済んだ後に視聴することもでき、日本語を習いながら同時に天理教のことも知る新しい試みだったように、筆者は感じている。その教科書を今でも手に取ると、開発に携わった先輩の先生方の顔が浮かぶ。そしてその教科書の編集に関しても、いろいろと意見の交換があったのだろうかとも思っている。

語学教育と信仰面

教科書の中に天理教に関する内容を盛り込んでいくことに関しては、様々な意見がある。まずは日本語を習得して、それから教を身につけていくという考え方もあれば、天理の学校なのだから留学初期の頃から授業の中で教えることにも扱っていくべきなどと、話し合えば様々な意見が出て来るようだ。あるいは教義に関する授業もあるのだから、特に日本語の授業の時に天理教に関するものを無理に入れなくてもいいのではないかという意見も当然、出て来るだろう。まずは日本語を徹底的に仕込み、それから教義に関することも学んでいくという方向性もある。バランスの問題なのかもしれないが、難しい問題だと思う。ただ日本語だけを教えているのでは、他の日本語教育機関と同じではないか。海外の教会子弟や信者を天理に引き寄せて、育成していくのに日本語だけを教えていていいのかと、現場の教員が悩むことも多かったのではないかと。しかし、逆に深く教理を身につけていくには、まずは原典にも触れられるように日本語を習得し磨いていくことも大事なのではないかという考え方もあるように思う。簡単に答えが出るような問題ではないようにも感じる。

筆者が別科に勤務していた頃、週に1回午後の授業で「天理教教義」の授業があったが、日本語を教える教員ではなく、別科副主任の先生が担当していたので詳細についてはわからない。ただ授業の中でわかりやすい日本語で噛み砕いて説明されていたことは想像できる。筆者も今までの経験を通して、いろいろな方からいろいろな意見を聞いた。しかし、皆、それぞれの立場からの意見であるから、現場にいる者としては出来ることを精一杯やっていくしかないという思いでやってきたのではないだろうか。天理の学校なのだから教科書の中に天理教の話などをどんどん盛り込めばいいという簡単な問題ではなく、先人の方々も随分と頭を悩まされたのだろうと想像している。